

パフォーマンス評価の書道授業への運用と課題の整理

谷 口 邦 彦

Application and Assessment of Performance Evaluation of Shodo Calligraphy Courses

Kunihiko TANIGUCHI

要 旨

「パフォーマンス評価」は「ある特定の文脈のもとで、様々な知識や技能を用いて行われる人のふるまいや作品を、直接的に評価する方法」のことで、「パフォーマンス課題 (performance task)」を与えて解決・遂行させ、それを複数の評価者が、「ルーブリック (rubric)」と呼ばれる評価基準表を用いながら、評価していくもの」。思考力・判断力・表現力の評価が求められ、その評価方法の一つとして注目されている。

パフォーマンス評価が期待される点の一つに、「永続的な理解」への評価が可能ということがあげられ、書道においてもそれが求められることから現在試行的に実践している。本稿はその試行の過程で見えてきた課題を整理し、今後の実践へと生かすためのものである。

は じ め に

谷口はかつて「SECIモデル」にあてはめる手法により、書道における学力の分類と整理を試みた^{注1}。図1が分類・整理したモデルになるが、この提案の過程で生じた課題は、その評価の方法についてであった。評価方法はもとより、どうアプローチすればよいかすらわからない状況であった。

その後、「パフォーマンス評価」という新たなアプローチが紹介された。例えば、松下によれば「ある特定の文脈のもとで、様々な知識や技能を用いて行われる人のふるまいや作品を、直接的に評価する方法」のことである。「パフォーマンス課題 (performance task)」を与えて解決・遂行させ、それを複数の評価者が、「ルーブリック (rubric)」と呼ばれる評価基準表を用いながら、評価していくもの」という^{注2}。昨今、思考力・判断力・表現力の評価が求められ、その評価方法の一つとして注目されている。

パフォーマンス評価が期待される点の一つに、「永続的な理解」への評価が可能ということがあげられるが^{注3}、この点も試行のきっかけとなり、本学科卒業生へ協力を求め、実践を継続中である。本稿は、この試行の中で見えてきた課題を明らかにするとともに、整理することで次の実践へ生かしていくためのものである。

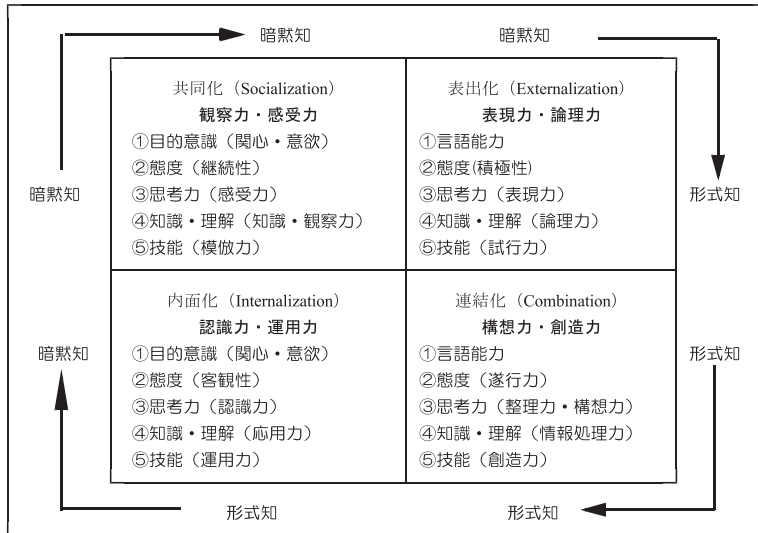


図1 SECIモデルによる書道授業における学力の分類・整理 (2003谷口作成)

1. パフォーマンス課題の設定にあたって

書道授業においても、特に思考を用いて作品を鑑賞したり作品を制作したりしてきたわけで、知識に依拠しつつも考え判断しながら学習活動を行ってきた。先ごろ文科省から示された資料に「書を構成する要素とその表現効果の視点からの理解」「書を構成する要素とその関連から生み出される働きを捉える」「関連づける」^{注4}等の文言が見えるのも当然のことで、理解することは、比較や並列等とあわせく結びつけることがポイントになるものと考えている。

深まらない書道の授業は、この＜結びつける＞こととともに＜本質的な問い＞が設定されていない場合が多い。具体的な事項を①比較・並列・関連させ→抽象化された事項②法則化するという学習にするために、＜本質的な問い＞の整理が必要となる。次に示す図2はその試案である。

試行的な実践を行うにあたり、パフォーマンス課題を例示した(表1)。「SECIモデル」を元に、評価したい学力を念頭におきながら作成したものである。特にこれまで単発で行われていた活動を＜結びつける＞ことに留意した。ここでは学習者の関心・意欲という点にはあまり配慮していない。作成した課題例は表1の通りである。

例1は、これまでの楷書学習で行われている授業内容を組み合わせている。すなわち、作品に関する調査(歴史背景、筆者について等)、臨書作品の制作(制作、相互批評等)、は通常行われる。これらに現実的なストーリーを加えたというものである。それにより、単発で行われるこれらの活動が結びつき、よりリアルに学習者のものとなっていく。つまり、評価の対象となるのは、①臨書作品制作における技能。②臨書作品制作における批評コメント。③調査活動における取り組みの状況。④調査活動における深まり。⑤発表における取り組みの状況。⑥発表における発表内容等があげられよう。

例2は、用具用材の工夫に関するものである。墨の成分へ着目し、成分の特質を知る。通常は知識として学ぶことはあるとしても、ここまで深く掘り下げて扱うことはなかっただろう。試行

教科全体を貫く「本質的な問い」(試案)
 書表現とはどんなものだろう。書道の楽しさや素晴らしさとは何だろう。
 人生を豊かなものにするために、自分の生活に書をどう取り入れていったらよいだろう。

A 表現

1. 漢字の書

- ①漢字の書体はどのような要因で変わっていくのか(書体の変遷)。
- ②中国の書と日本の書はどのように違うのか(唐様の書、和様の書)。
- ③漢字の書の表現ではどのような工夫が見られるだろう(用具用材、線質、全体構成)。

2. 仮名の書

- ①仮名はどのような要因で生まれたのか(仮名の発生)。
- ②仮名の流動美の要因は何か(連綿、変体仮名)。
- ③仮名は平安時代の貴族生活にどのように根ざしていたのだろう。
- ④仮名の書の表現ではどのような工夫が見られるだろう(用具用材、線質、全体構成)。

3. 漢字仮名交じりの書

- ①なぜ漢字と仮名を交えて表記するのだろう(日本語表記の特色)。
- ②良い字とはどのようなものか(文士の書など)。
- ③自分の思いを書に託すことは可能だろうか(用具用材、線質、全体構成)。

4. 篆刻・刻字

- ①印にはどのような役割があるのだろう。
- ②作品の表現効果を高めるための印の押し方にはどんな工夫があるだろう。
- ③石や木へ文字を刻すことと毛筆で書く書作品は違うのか。

5. 生活の書

- ①なぜ小筆や筆ペンを使うのだろう(礼儀作法、書式)。
- ②室内に飾るにはどんな書がふさわしいだろう。
- ③パソコンに行書のフォントが入っているのはなぜ(看板など身の回りの文字文化に着目)。
- ④パフォーマンス書道はなぜうけるのか(社会と書道の関わり)。

B 鑑賞

- ・この書は何を表現しているだろう。
- ・漢字の書から伝わってくる印象とはどんなものだろう。
- ・漢字の各書体や仮名(万葉仮名、草仮名、女手)はどのように発生してきたのだろう。
- ・なぜ美しいと感じるのだろう(散らし書き、余白の美)。
- ・角張って画数の多い漢字と、丸みを帯び画数の少ない平仮名を交えて表記する時の効果は何だろう。
- ・筆者の思いや表現意図が伝わってくるのはどこからだろう。
- ・立体的な表現のおもしろさとはどんなものだろう。
- ・美しい字にはどのような共通点があるだろう。
- ・手書き文字、活字にはそれぞれどのような良さがあるだろう。
- ・身体表現と書表現の関わりとはどんなものだろう。

図2 教科を貫く「本質的な問い」(試案) (2013 谷口作成)

表1 本質的な問いに関連させたパフォーマンス課題(例) (2013 谷口作成)

<p>(例1) 1-③に関連して あなたはA町にある公民館のたった一人の職員です。公民館には幅5メートルほどのささやかなギャラリーがあり、2ヶ月間の予定で「九成宮醜泉銘の魅力」を紹介することになりました。展示のための予算は限られており、すべて自前で展示品を用意しなければなりません。地域へ協力を求め、展示品を作成してください。</p>
<p>(例2) 1-③に関連して あなたは日本を代表する書道の大家です。最近作品がマンネリに陥り、新境地を切り開かなければなりません。そこで、「一字書」に取り組むことにしました。漢字一文字を魅力的な滲みで表現したいと考えました。美しいと思う滲みになるよう工夫し、まず、半紙へ試作品を作りたいと思います。グループで相談しながら作品を制作してください。</p>
<p>(例3) 2-③に関連して 源氏物語(もしくは伊勢物語)の中に出てくる和歌をやりとりする一場面を選び、登場人物の気持ちや、やりとりの状況をイラストなどで紹介した台紙を作成し、それぞれの歌を書いた色紙(短冊)をその台紙に貼り付けて提出してください。</p>
<p>(例4) 5-③に関連して あなたは大手旅行会社の広島支店で働く、売り上げ業績優秀な営業マン(ウーマン)です。先日、近隣のA町広報課から最近めっきり客が減り、このままではつぶれる旅館が出てきそうだから何とかして欲しいと相談されました。そこで、まずA温泉への「格安日帰り温泉ツアー」を企画し、参加者へは特典をもうけたいと思います。その特典やツアーの金額を考え、参加者呼びかけるA4判のパンフレットを作成してください。</p>

錯誤を繰り返しつつ、答えのない課題に取り組むために、表現過程で紙と結びつくことで、達成感を得ていく。評価の対象となるのは、①墨の成分など墨への知識。②薄墨を作成する際の取り組みの状況。③作品制作における取り組みの状況。④表現における相互批評やコメント等。⑤発表における取り組みの状況。⑥発表における発表内容等があげられよう。

例3は、国語授業とのクロス的な題材として設定した。仮名の学習は仮名の成立等も含めて扱うことになっているが、漢字から仮名、仮名から仮名への変遷は、なかなかイメージを提示しにくい。国語の題材と結ぶことにより、物語から当時をイメージすることで仮名への関心も生ずるのではないかと考えた。評価の対象となるのは、①仮名の学習における基本技能（単体、変体仮名、連綿、散らし書き）。②国語科における題材の読み。③作品制作における取り組みの状況。④発表における取り組みの状況。⑥発表における発表内容等があげられよう。

例4は、日常生活の中の文字文化を取り上げたものである。通常、パソコンによる文書作成の際、様々なフォントを使い分けているが、ここではパンフレットチラシの作成という課題を設定することにより、フォントの使い分け、さらには、筆文字の効果等の結びつきについて理解を図ることができるだろう。評価の対象となるのは、①筆文字と活字の表現効果の特質に対する理解。②それぞれの効果的な表現に関する知識理解。③制作物における表現技能。④発表における取り組みの状況。⑤発表における内容等があげられよう。

2. 試行的実践における課題

2014年度から2015年度にわたる約2年間、本学卒業生に協力を求め、パフォーマンス評価を用いた授業実践を試行してみた注5。とりわけ書道では先行事例も見あたらず、手探りで開始となった。当然のことながら、いくつかの課題が浮かび上がってきた。整理すると次のようになる。

- ア. 学習者の関心・意欲に関わり、真に取り組みたい、取り組むに値する課題設定になっているか。
- イ. ルーブリックの作成段階では、B基準C基準などの線引きが難しく、曖昧になる。
- ウ. コメントを求めると、当然のことながら、その都度時間がかかる。逆に、時間の制限を設けると内容が不十分になるというジレンマ。
- エ. 個々の留意点を理解している生徒でも、それを総合的に作品に当てはめ自己評価したり、相互評価したりできるレベルに到達させるにはまだ教師の力量が足りない。

これらの課題を解決へと導くためには、前提として、教師の力量に着目せざるを得ない。授業をどうデザインしていくかが求められる。その意味で、教師の力量アップに格好の場でもある。

アについては、課題設定において、何らかの本質について追究していける課題になっていることが求められる。学習者の興味を惹く課題であっても、そこに普遍的な本質を突く課題が含まれていなければ、学習活動が薄いものになる。だからこそ、パフォーマンス課題を設定する意味がある。

すなわち、これまでの課題の設定では見えてこなかった本質部分が見えてくることである。それは課題の組み合わせにより可能となる。課題と課題を結ぶことにより新たな本質が浮かび上がるということである。

イについては、たびたび指摘されることでもある注4。時間短縮のために、ミニチュア版の課題を設定することも検討する必要がある。また、年間指導計画を見直すことも必要になろう。

ウについては、学習者の「慣れ」の部分が大きいと考える。一定期間繰り返すことにより学習者はすぐに慣れ、まず、コメント意見の分量は増やすことが可能。しかし、その内容の質になる

と一概には言えないだろう。長期的、組織的に取り組んでいく必要がある。

エについても教師の力量に関わってくる課題だが、ルーブリックとの関わりも見逃せない。ルーブリックは評価に用いるのみならず、学習者の活動をコントロールしていくことを忘れてはならない。そもそもルーブリック作成は難しいが、作成段階で曖昧で安易な基準を設定してしまうと、活動がコントロールしにくくなる。評価基準は目標の裏返しでもある。

3. 課題の整理

松下は、このほかにも課題数が制限されてしまうことを指摘する注6。パフォーマンス評価は、＜狭く深く＞を指向するため、＜広く浅い＞テストと併用する、あるいは他の評価と組み合わせることを勧めている。これまで見えなかった学力を評価する一方で、従来評価してきた学力を無視して評価するのは「一般化」の点で無理があるという。

また、客観テストよりも「信頼性」が低いことをあげる。実技教科であっても、ひとまずこのことにも留意したい。さらに、言語による場面設定の問題。真実味のある課題といって、真実味を追究しすぎると求める答えが逆に分散することを指摘する。数学でないにしても、書道（芸術）の範囲を超えてしまうと評価の対象から外れてしまうということだろう。

最後に、松下も＜ルーブリックの落とし穴＞を指摘している。①学習者の意見コメント→②見られる特徴的なコメント＜数値化＞→③観点別の得点→④合計点→⑤学習集団における位置づけ、ととらえると、学習者の振る舞いは次第に抽象化されていくことになる。指導に生かす評価という点からみると矛盾が生じ、本来、パフォーマンス評価によって目が向けられなかった振る舞いを浮かび上がらせるはずが、そうはなっていないことの課題をあげている。

おわりに

このように、試行した実践を踏まえつつ書道へのパフォーマンス評価運用における課題をあげ、現段階で整理を試みた。このパフォーマンス評価は、これまで見過ごされてきた学習者の振る舞いを評価できる点は新しく可能性を秘めている。一方で矛盾も併せ持ち、これまで行われてきた評価方法と組み合わせながら運用していくことも確認できた。これらの課題を踏まえつつ、書道では実践を重ねる時期であると考えている。

注

- 1) 谷口「高等学校書道における学力の分類と整理」『国語国文論集』第34号、2004、安田女子大学日本文学会（P.21～P.30）において、知識・技能のみではない学力の存在を示した。
- 2) 松下佳代『パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』日本標準、2007、p. 6～7 参照。
- 3) 西岡加名恵『逆向き設計で確かな学力を保障する』明治図書、2008、p14～15に、「知の構造」と評価方法の対応図が示されており、＜原理と一般化＞への定着を評価できるモデルとなっている。
- 4) 平成28年2月23日教育課程部会芸術ワーキンググループ（第5回）資料1～2にイメージ図が示されている。文部科学省。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/069/siryo/_icsFiles/afielddfile/2016/06/08/1871888_12.pdf
- 5) 谷口「パフォーマンス評価による書道授業改善の試み」安田女子大学実践教育研究所『年報』.2016.p37～p45。3名の卒業生が実践を持ち寄り発表の場を設けて課題を出し合った。

- 6) 松下佳代 前掲書, p48において, 松下は課題の一つ目として, 「多くの時間と労力を要する」難点をあげている。課題の開発・実施や採点を通して多くの時間と労力を要し, ルーブリックの修正等を含めた採点作業の複雑さを指摘している。

主要参考文献

- 高浦勝義『絶対評価とルーブリックの理論と実際』黎明書房, 2004
西岡加名恵『逆向き設計で確かな学力を保障する』明治図書, 2008
松下佳代『パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』日本標準, 2007
Sue Fostaty Young・Robert J.Wilson 訳・小野恵子『「主体的学び」につなげる評価と学習方法』東信堂, 2013
ダネル・スティーブンス・アントニア・レビ『ルーブリック入門』玉川大学出版部, 2014
溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂, 2014
松下佳代『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房, 2015
松下佳代, 石井英真『アクティブラーニングの評価』東信堂, 2016
溝上慎一編『高等学校におけるアクティブラーニング (理論編)』東信堂, 2016
安永悟・関田一彦・水野正朗『アクティブラーニングの技法・デザイン』東信堂, 2016

[2016. 9. 29 受理]

コントリビュータ：信廣 友江 教授 (書道学科)